



TITLE:

漢代郡縣の財政機構について

AUTHOR(S):

佐原, 康夫

CITATION:

佐原, 康夫. 漢代郡縣の財政機構について. 東方學報 1990, 62: 1-29

ISSUE DATE:

1990-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66722>

RIGHT:

漢代郡縣の財政機構について

佐 原 康 夫

はじめに	一頁
第一章 財庫の名稱と官名	二頁
第二章 郡縣の金匱と財庫	八頁
第三章 郡縣の少府	一五頁
おわりに	二三頁

前漢代の財政機構は、大司農の管轄する國家財政と、少府の管轄する帝室財政に截然と分かれたれ、それぞれが獨立した賦稅收入によって運營されていた。この區分は周知の如く加藤繁氏の研究によって明らかに⁽¹⁾なり、以後の財政史研究の基本的枠組みとして受け繼がれている。現在學界では、國家財政の機構的解明とともに、二つの機構の區別がどのようにして生じたのか、また後漢代にかけてどのように變化していったのか、という複雑な問題が絶えず同時に追求されている。しかしこのような研究の方向は、とかく視角が中央の財政に限られがちになり、中央の財政を支える基礎となる郡縣の財政については、ほとんど觸れられることがない。

雲夢秦簡の發見は秦漢の財政史研究に新たな展開をもたらすこととなった。中でも、從來の文獻史料で名稱しかわからなかった大内や少内といった財庫については、特に活潑な議論が戦わされている⁽²⁾。しかしその議論も、秦簡に見えるこれ

らの財庫が、漢代の帝室財政と國家財政の區別とどのように結びつくか、という觀點からのもので、秦簡については中央の財庫と地方の財庫の關係を問題にしながら、漢代については中央における財庫の機能分化ばかりが扱われる、という不整合も時として見られる。

中央における帝室財政と國家財政の區別が、郡縣制支配機構の全體の中でどのような機能を果たしたか。これが漢代財政史の重要な問題であるとすれば、郡縣の財政機構をいつまでも等閑に付しておくことはできない。もとより課題の大きさに比べて史料は決して十分ではなく、個々の史料の解釋にも諸説あるのが現状である。本稿では漢代の郡縣における財政機構の一端を、「ぜにぐら」としての財庫の形態と機能を通じて明らかにしたい。そのために、まず漢代の「ぜにぐら」がいかなるものであったかを整理することから始めよう。

第一章 財庫の名稱と官名

(1) 財庫の名稱

一口に財庫といっても、その實態はさまざまである。まず「ぜにぐら」一般の種類と名稱を、漢代に行なわれた訓詁の面から整理しておこう。文獻の中で「ぜにぐら」を指して用いられる言葉の定義を、以下に『說文解字』から列挙する。

府、文書の藏なり。(九篇下)

庫、兵車の藏なり。(同)

臧、善なり。(三篇下)

閣、扉を止むる所以のもの。(十二篇上)

内、入なり。(五篇下)

府について、許慎は文書庫を原義としているが、鄭玄は「府は寶藏貨賄の處」(『禮記』曲禮下、「在府言府」注)としている。庫は本來兵器庫だが、『釋名』釋宮室に「庫、舍なり、物の在るところの舍なり」という如く、財貨や器物を貯える場所をも指す。以下段玉裁の注に従えば、臧は後世くさかんむりを附けて「藏」となる字。よい物は必ずしまっておくから「おさめる」こと、さらに「くら」という意味にもなる。閣は扉のストッパー。とめる、とどめるという意味合いから、棚のような收藏手段を指すようになったらしい。内は「入れる」こと。そこから「入れる場所」をも指すようになるが、原義の方は後世「納」という文字で表わすようになった。

最後にあげた「内」については、もう少し補足が必要である。『論衡』別通篇に、

富人の宅、一丈の地をもって内となす。内中に有るところ、柙匱の贏すところは、縑布絲帛なり。貧人の宅もまた一丈をもって内となす。内中空虚にして、ただ四壁立つのみ。故に名づけて貧⁽³⁾という。

とある。ここに見える「内」は一丈四方、すなわち現在の四疊半ぐらいの大きさで、衣類の入った長持などを入れておく小部屋、一言でいえば納戸である。中身の多少は別として、このような納戸が貧乏人の家にもあったのである。ところで建築用語としての「内」は、「一堂二内」というように、「堂」の奥につながる部屋を指している。⁽⁴⁾家屋を構成する部屋としての「内」と、納戸のような「くら」としての「内」とを、名稱から嚴密に區別することはできない。⁽⁵⁾

『太平經』六罪十治訣に、「願わくは仁者の行を聞かん」という問いに答えて、およそ次のような論が展開される。

財物は天地のどちらにも屬さず、人に屬して困窮した者を救う役目を持っている。だから富める者が貧しい者を助け、やることこそ、仁という行爲なのである。しかし富者は財を幽室深く隱匿して貧者を救おうとしないばかりか、困窮につけこんで倍もの利息を取ろうとさえする。このような者は天・地・人の怨み、百神の憎しみを買うことになる。

富者はたまたま財物の集まるところを得ているに過ぎない。それはちょうど、大きな倉の中の鼠がたらふく食べていても、倉の穀物が鼠のものだとはいえないのと同じである。少内の錢財とて、もとより一人の人間のためではなく、不足した者に使ってもらうためにあるのである。この理も知らず、財産をずっと自分ひとりのものだと思い込んでいる愚かな富者は、大不仁の人というべきである⁽⁶⁾。

ここに見える「少内」は、富者のぜにぐらを一般的に指していると考えてよい⁽⁷⁾。前引の『論衡』と對比すれば、「少内」は錢貨をしまっておく小部屋、いわば「小納戸」ほどの意味となろう。

このように「ぜにぐら」には、土藏のような獨立した建物から納戸やロッカーのような小規模なものまで、さまざまな形態があった。「ぜにぐら」を表わす言葉は、「しまっておく」ことから派生して「しまっておく場所」を指すようになったものが多く、どこか漠然としている⁽⁸⁾。實際問題として、このような收納場所が「ぜにぐら」なのか、單なる物置きに過ぎないかは、持ち主の使い方や財力次第という面もある。そこで次に、漢・六朝時代の家屋の中で「ぜにぐら」が實際にどのように呼ばれ、配置されていたのかを確かめておきたい。

(2) 墓室における財庫

漢代の家屋の中の財庫については、遺跡はもちろん、畫像資料もない。手掛かりは、家屋に見立てた墓室を持つ墓葬である。河南省唐河縣では、王莽の天鳳五年（後一六）の紀年を持つ「鬱平大尹馮君孺人」墓が發掘されている（圖1）⁽⁹⁾。墓室は石と磚で築かれ、南北に耳室を持った前室と、回廊狀の側室に圍まれた中・後室からなっている。各室の出入り口に「鬱平大尹馮君孺人車庫」といった題記があり、墓室の各部分の名稱が知られる。墓門を入って左側の耳室は車庫である。右側の耳室には題記がないが、漢代の一般的な例から見て、ここは倉や廚房にあたると考えられる⁽¹⁰⁾。前室と中室の間の門

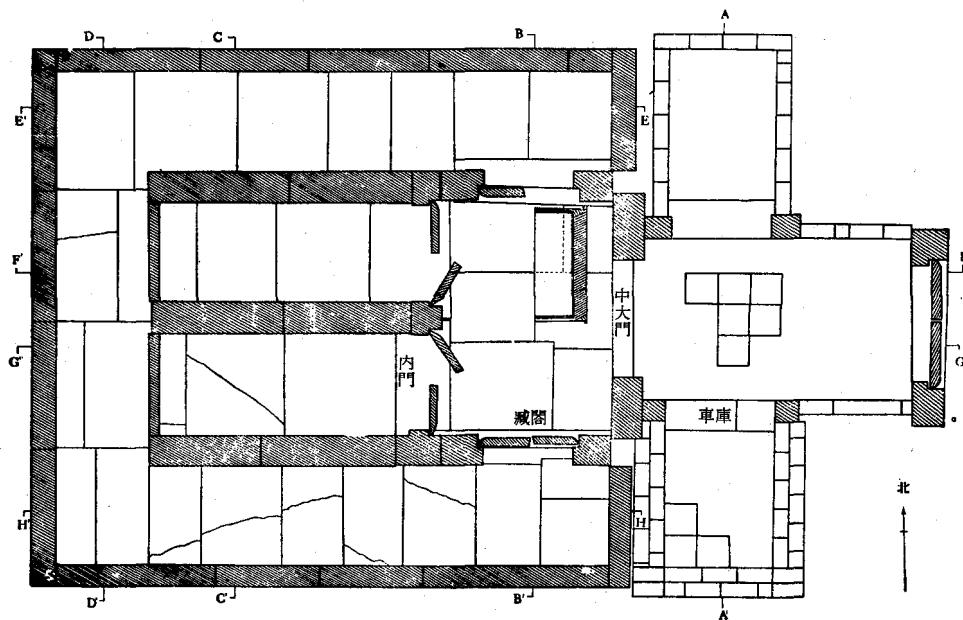


圖 1 鬱平大尹馮君孺人墓平面圖

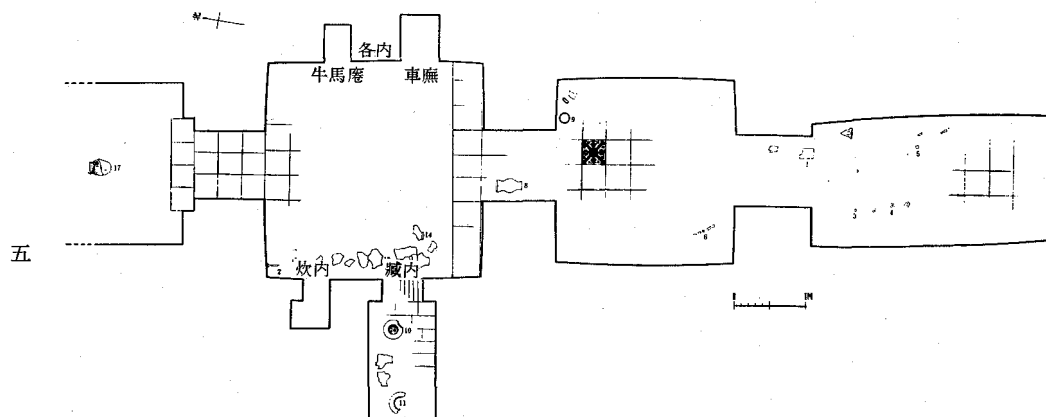


圖 2 嘉峪關三號西晉墓平面圖

は「中大門」、左右二室に分かれた後室の門は「内門」である。側室の南側の入り口は、「臧閣」と題されていた^⑪。前稿で論じたように、「閣」はもともと門の脇の潛り戸だが、建物の内部の小門をも指す^⑫。したがってこの側室は、後室に葬られた墓主の調度などを納めた「くら」ということになる。この墓は、三進院式の建築を模し、前院の左右に車庫と倉あるいは厨房を具え、中院の脇に「臧」を持った家屋なのである。

時代は下がるが、嘉峪關三號西晉墓も同様に家屋に見立てた墓室を持っている(圖2)^⑬。こちらは前・中・後の三室と、前室の左右下層に二つずつ設けられた耳室、その上層に三つずつならんだ壁龕からなる磚室墓である。墓門を入れて右側手前の耳室が「炊内」、奥のやや大きな耳室が「臧内」である。左側手前は「牛馬庵(＝圈)」、奥には「車廡」があり、その上の壁龕には「各内」という題記があった。これは「閣内」の省略である。この墓が見立てた家屋には、家畜の圍いと車庫、炊事場、「臧内」という「くら」があり、「閣内」という棚あるいはロッカールームも設けられていたのである。

このように、漢・六朝期のある程度大きな家屋には、車庫や穀物倉とともに、家財を納める「くら」もあった。その規模や配置は一概にいえないとしても、文獻に見られる「臧」「閣」「内」などの名稱が、實際に廣く民間の家屋で使われていたことは確かである。

ところで、前稿で論じたように、漢代の官衙は本質的にはその役所の長官の公邸であった。長官とその家族や使用人などが住む區畫を中心とし、その周圍に屬吏の事務所や倉・庫・獄などの附屬施設が配置された官衙の建築は、當時の「第」などの大邸宅とほぼ同一の構造を持っている。そのどこかに、公金などを納める「ぜにぐら」があったはずである。もちろん官衙の大小や職掌によって、大きな土藏から納戸、あるいはロッカーに至るまで、その規模や呼び名はさまざまだろう。ここにあげた民間の家屋の「くら」の例は、官衙のそれとまったく同じではないにせよ、参考にはなるだろう。このことを踏まえて、次に財庫の官名の特色を整理してみよう。

(3) 財庫と官名

秦漢時代の財政機構の中には、「くら」に由来する官名が随所に見出される。例えば秦の咸陽には、「大内」という財庫が置かれていた。雲夢秦簡の金布律によれば、「大内」は咸陽の諸官から官給の衣服の残りを回収したり、咸陽への輸送が可能な範囲から、使えなくなった銅器・鐵器を回収して拂い下げていたようである。¹⁵ 前漢初期の長安にも、「京師の府藏」として「大内」が見出される。¹⁶ 「大内」はその後おそらく武帝時代から、「都内」と呼ばれるようになったらしい。¹⁷ 前漢後期の「都内」には一から順に番號のついた倉庫が建ちならび、大量の錢や布帛が納められていた。¹⁸ 國家の「錢・穀を掌る」大司農の下で、「錢」の部分を擔當する「都内」は、「穀」の部分を擔當する太倉とともに、國家財政を支える二大收藏機構であった。このような「大内」や「都内」の「内」が、前述のように納戸のような「くら」から来ていることは明らかである。後漢代になると、大司農の財庫は「庫」とか「帑藏」と呼ばれるようになり、「内」という名稱は用いられなくなったようである。

さて、秦代の縣には、「少内」という公金出納機關があったことがわかっている。公金出納を擔當する「少内」は漢代にも見出されるが、秦代のそれと同一視してよいかどうかは検討を要する。ここではひとまず、秦漢時代を通じて、財政機構の中に「少内」という官名があったことを指摘するにとどめたい。「少内」は前述のように、錢財を納める「小納戸」という意味で、民間の家屋でも使われた言葉である。

ところで、帝室財政を預かる「少府」という官名について、應劭は次のように説明している。「少府」の「少」は「小」という意味で、天子の私養を國家の經用と區別するために、別に小さな藏をつくったのである。¹⁹ もちろん實際には、「少府」は「くら」自體の名前ではなく、九卿の一員を長官とする巨大な財政官廳の名稱であった。しかし同時代において

「少府」の「府」は「くら」を意味し、「少」は「小」に通ずると意識されていたことは間違いない。

ここに紹介した大内（都内）、少内、少府といった官名は、もともと宮殿や官衙の「くら」や「納戸」に由來する、「お藏役」「お納戸役」といった意味あいの即物的な官名である。しかもその名稱に含まれる「大」や「小」（少）は職掌の上下關係などの規準から統一的に區別されているわけではない。財庫は公金の出納をとまなうあらゆる宮殿や官衙に何らかの形で存在し、その職掌や權限に應じて、上は九卿から下は斗食の吏に至るまで、さまざまな官職が置かれる。それらはそれぞれに、その宮殿や官衙の「くら」に由來する「お藏役」「お納戸役」として、似通った官名を帯びていたのである。したがって、たまたま名稱のわかる「お藏役」だけをとりあげて、「少内は大内に屬する」とか、「少内は少府と同じである」といった結論を導くことには意味がない。⁽²⁰⁾ 財庫の分析は、それがどのような宮殿や官衙に屬し、そこで如何なる機能を果たしていたかという問題を離れてはあり得ないのである。

以上のような、官衙の構造と財庫に關するいくつかの前提條件の考察を踏まえて、次に郡縣の財政機構の中の財庫を具體的にみていきたい。

第二章 郡縣の金曹と財庫

(1) 機構の沿革

秦漢時代に、郡縣の財政がどのような機構で運營されていたかを、まず簡単に整理しておこう。

雲夢秦簡によれば、統一前後の秦の縣には、「少内」という公金出納機關があった。金布律によれば、少内は官有物資などの辨償責任を負った官吏から、その債務を記した文書に基づいて取り立てを行なうとされる。⁽²¹⁾ また封診式と呼ばれる

書類の書式例では、奴隸を官で買い取ってほしいという民間からの訴えを受けて、少内の某と佐の某がその価格を調査し、縣丞の立ち會いでこれを買取るといふものがある。⁽²²⁾「少内」は、いわば縣などの會計課にあたり、少内―佐という統屬關係の官吏が置かれていたようである。官衙の財庫については、「内史雜」律に細かい規定がある。それによると、各役所で一日の事務が終わったら、財貨を納める「臧府」と文書類を納める「書府」に火の氣がないことを確認して戸締まりをし、夜間は令史が巡回して警備にあたることになっている。⁽²³⁾これはあらゆる役所にあてはまる一般規定であるから、「臧府」や「書府」も普通名詞として用いられていると考えた方がよい。縣の「少内」が管理する「臧府」が實際にどのように呼ばれたかは確認できない。また、秦代の郡の機構についても、ほとんど考察の手掛かりがない。

前漢後期になると、郡縣の官僚機構が次第に整備され、功曹・主簿をはじめ臧曹・戸曹など諸曹の部局分けが定着していく。各曹には掾・屬以下令史・書佐などが置かれた。このうち財政關係の部局は倉曹と金曹である。⁽²⁴⁾倉曹は官の穀物倉を管理して、農民から納入される田租などの収入と、官吏などに支給される食糧の支出を擔當する。一方金曹は、算賦や市租のように貨幣の形で納められる賦稅収入と、官吏の俸給などの支出を管理する。郡縣の財庫は、一般的には「庫」と呼ばれることが多い。このような機構は郡と縣で基本的に變らず、兩者の違いは質的な差よりも、量的な差であった。漢代の金曹や倉曹の掾史は、職務の重要性にも關わらず、その事務の繁雜さが地位の上では逆に作用して、長官の側近グループである「門下」には數えられない。⁽²⁵⁾そのせいか、文獻史料の中に、金曹の官吏の職務に關する具體的な記述はほとんどない。このように、秦の縣の財政機構と前漢後期の郡縣のそれとの間には、何らかの繼承關係が想定できるとしても、違いがあることもまた事實である。諸曹の成立という、前漢後期の地方行政機構がたどった獨自の過程の中に、財政機構の變化を位置づけてみる必要がある。以下居延漢簡を手掛かりとして、「くら」の管理が如何に行なわれたか、という觀點から、漢代の地方財政組織を整理してみたい。

(2) 財庫管理と文書行政

一萬點にのぼる居延漢簡のうち約半数は、A 8 破城子、居延都尉に屬する甲渠候官の跡から出土した。候官は配下の候隄に分配する錢貨や武器食糧を貯藏し、帳簿を作成する、文書行政の末端である。候官の長は候(秩比六百石)、その下に丞・尉各一人が置かれる。五鳳四年(前五四)の例では、候官本部には士吏(百石)三人、令史三人、尉史四人(いずれも斗食)が所屬した。⁽²⁶⁾さらにその下に、「鄣卒」として十名ほどの兵卒がいる。ここから、次のような倉庫類の當直報告の斷片が出土している。

- 1 ☐五月戊寅尉史蒲敢言之迺丁丑直符倉庫戶皆完毋盜賊發者
(二六四・九 勞二一七)
- 2 ☐年十月乙酉朔乙酉令史義敢言之
☐封皆完 ☐盜賊發者門戶……
(三三・四 勞一七九)
- 3 ☐壬申直符倉庫戶封皆完毋盜賊
(二五七・二二 勞二四八)
- 4 ☐酉直符倉庫戶封皆完 ☐
(七二・六 勞一八五)
- 5 ☐倉庫戶封 ☐
(一〇四・一六 勞三二一)
- 6 ☐直符一日一夜謹行視錢財物臧內戶
☐言之
(五二・四五 勞一八八)
- 7 ☐謹行視錢財物臧內戶封皆完
(二六六・一六 勞三一三)
- 8 ☐直符一日一夜謹行視錢財物
☐言之
(八四・二三 勞二七六)
- 9 ☐敢言之迺壬子直符謹行視 ☐ ☐ ☐ ☐
(二三一・一二 勞二八五)
- 10 ☐謹行視錢 ☐
(一九一・一 勞四三三)

1—5は倉・庫の當直報告で、報告の日附と擔當者名を書いたあと、「某日直符したるに、倉・庫の戸封皆な完、盜賊の發^あく者なし……」と書かれる。「直符」は當直の意⁽²⁷⁾。これに對して6—10は財庫の當直報告。「臧内」という財庫の名稱は、前章で紹介した嘉峪關三號墓の例と同じである。こちらは報告の日附と擔當者名を記したあと、「一日一夜、謹みて錢財物を行視したるに」と書かれる點が異なる。ちなみに候官程度の規模では諸曹の部局分けはなく、各人への月俸支給事務も士吏や尉史・令史が交代で行なったようである。⁽²⁸⁾ 彼等が二十四時間交代で「臧内」の「直符」となり、その見張りとともに中身の出納と帳簿つけの責任を負ったのではないかと考えられる。

一方、鄣卒の作業簿からは、彼等の日常の作業分擔が知られる。「吏養」(炊事當番)「馬下」(うまや番)「守園」(菜園耕作)といった仕事の中に、「治計」も見られる。心得のある兵士が帳簿つけを手傳うこともあったのだろう。さらに「守邸」⁽²⁹⁾「守閣」という倉庫番もあった。この「邸」⁽²⁹⁾「閣」が前述の倉・庫・臧内と同一の「くら」なのかどうかはわからない。⁽³⁰⁾ このように候官では、吏が交代で財庫の警備、中身の管理と帳簿つけの責任を負い、おそらくその指揮監督下で、兵卒が分擔して倉庫番などを行っていた。これは、官衙における財庫管理のミニマムな姿を示していると考えてよい。では、金曹のような財政専門の部局を持った官衙はどうだろうか。破城子からは、居延縣の屬吏の月俸支給をめぐる次のような爰書が発見されている。

尉史李鳳 自言。故爲居延高亭長。三年十二月中、送詔獄證^二。得便從居延迎錢、守丞景臨、取四年正月奉錢六百。至二月中、從庫令史鄭忠、取二月奉。不重得正月奉。今庫掾嚴復、留鳳九月奉、不當留庫。證所言。

(二七八・三〇 甲一〇一三)

尉史李鳳はもと居延縣高亭の亭長。在職中、三年(年號不明)十二月に、詔獄の囚人を證言のため郡治驪得縣へ護送した。その間に居延縣からの送金を得て、守丞の景(驪得縣丞か)の立ち會いのものと、四年正月の俸錢六百錢を受け取った。

居延に歸ってから、二月に庫令史鄭忠から二月分の俸錢を受け取った。したがって正月分の俸錢を二重取りしてはいない。ところが現在、庫掾嚴復が、正月分を二重取りしたとして李鳳の九月分の俸錢支給を差し止めているのは不當である。⁽²⁾

二月の俸錢を李鳳に手渡した居延縣の庫令史鄭忠は、實際に錢を出し入れし、帳簿をつける係である。これは候官の令史や尉史が交代で行なっていた仕事と基本的に共通する。ただし「庫令吏」という肩書きは、居延縣の「ぜにぐら」が「庫」と呼ばれたこと、その管理のために専門の令史が置かれたことを物語る。このような候官と縣の相違は、縣が領内の住民からの徴稅業務をもった民政機關であることに起因するだろう。當然、「庫」は「臧内」より規模が大きかったはずである。もう一人の居延縣の役人、「庫掾」の嚴復は、李鳳の俸錢支給差し止めの決定を下している。九月分が差し止められたのは、この件が十月から九月までの會計年度末の帳簿検査で明らかになったからだろう。「庫掾」には會計検査の責任と、それに基づく處分の決定權があった。したがって「庫掾」は居延縣の公金出納責任者、普通知られている肩書きでいえば金曹の掾史にあたると考えてよい。

ところで、李鳳が居延縣からの送金を受け取る際、丞が立ち會っている。實際に手渡したのは、いうまでもなく饒得縣の金曹の吏だろう。自縣の吏であれば、それだけで済むはずである。しかし李鳳のように他縣の吏の場合、金曹の掾史よりもさらに上位者、居延縣に對して饒得縣全體を代表しうる立場にある縣丞が立ち會う必要があったのである。これは、前述の雲夢秦簡の中で、奴隸を買い上げる際に、少内の吏が代價を支拂い、これに縣丞が立ち會うという例と對應する。こちらは縣丞が縣全體を代表して、取り引きの公正を保證することになる。

このように、漢代の縣の金曹の職掌と權限は、秦代の縣の少内のそれを直接に引き繼ぐものであった。縣の會計課としての少内は、諸曹の名稱の體系が定着するに伴って、金曹と呼ばれるようになっていったのである。では、漢代にも依然として存在した少内をどのように考えたらよいだろうか。

(3) 漢代の少内

王隆の『漢官解詁』は、下級の倉庫番の任務について次のように伝える。

小官嗇夫は各おの其の職を擅らにす。倉・庫・少内の嗇夫の屬、各自その條理の職主するところを擅らにするを謂う³²。ここでは「小官嗇夫」の代表例として、倉・庫や少内の嗇夫があげられている。倉・庫・少内という收藏施設の組み合わせは、甲渠候官の倉・庫・臧内とも一致する。名稱はともかく、食糧倉、武器庫、ぜにぐらはたいいどこの官衙にも置かれていたのである。その番人に代表される「小官嗇夫」が上級者の職務を代行する時には、「小官印をもって某官の事を行なう」旨を斷わった上で封印を押すことになっていたらしい。「小官印」は「半通印」とも呼ばれ、秩百石の有秩嗇夫が持つ小型の官印である³³。「小官嗇夫」は、せいぜい秩百石までの小吏だと考えてよい。「その職を擅らにす」とは、それぞれの職務の條理（上下關係のすじめ）から定められた自己の職務に専念し、責任を持って遂行すること——變に融通のきく倉庫番はかえって厄介である——を意味する。その實例として、ある少内嗇夫があげられる。

前漢武帝時代の末、巫蠱の亂に連坐して郡邸の獄に繋がれた戾太子の孫——武帝の曾孫にあたることから皇曾孫と呼ばれる。のちの宣帝——は、當時まだ生まれて數箇月であった。罪のない赤兒を憐れんだ治獄使者丙吉の盡力によって、皇曾孫は處刑を免れ、前非を悔いた武帝の大赦を得て、晴れて自由の身となることができたのだが、獄を出ても行く所がない。丙吉は引き取り手を搜す間、乳母を手配して引きつづき郡邸に皇曾孫を置き、養育していた。しかしその後、少内嗇夫が「皇孫を養えという詔令はございません」と突っぱねたため、丙吉は自腹を切って幼な兒を養わなければならなかったのである³⁴。

顔師古はこの「少内」を「掖庭の府藏を主るの官」とするが、山田勝芳氏の論ずるごとく、これは郡邸の少内でなければ

ばならない。⁽³⁵⁾ 郡邸は「諸郡の邸の京師に在るもの」、地方の郡から長安に派遣される上計吏などが寢泊まりする官有の建物である。ただし郡邸の獄がそれぞれの邸にあったのか、郡邸全體で一つの獄が置かれたかは明らかでない。郡邸の管理は初め少府が管轄したが、中尉（執金吾）からさらに典客（大鴻臚）へと改屬されている。⁽³⁶⁾ 當時の郡邸がどこに屬したにせよ、少内畜夫は一介の小吏に過ぎない。「詔令」とはいっても、事實上は「正式な命令書」ほどの意味だろう。このような命令書は、中央官廳では「某月某日、某甲の詔書もて、某物若干を出だし、某官の某事に給せよ。」という書式であった。⁽³⁷⁾ 公金を支出するには、いつ、誰の命令で、何を、誰に、何のために支出するかを明記した書類が必要だったのである。この少内畜夫は、郡邸の「ぜにぐら」の金錢の出し入れと帳簿つけを擔當しているが、公金の支出や用途に關する決定權のない小吏である。しかし正式な書類がなければ、丙吉のような高官の要求でも拒否することができたのである。

このような漢代の少内は、金曹の前身としての秦代の少内と比べて、いささか様變りしている。秦代の少内は、廣汎な職務と權限をもつ縣の財政部局、いわば廣義の「お藏役」である。これに對して漢代の少内は官衙の「ぜにぐら」自體を指し、そこに置かれた官吏の官秩、職務も、縣や候官の令史・尉史と基本的に變らない。少内の意味合いは狹義の「お藏番」以上のものではない。官名は同じでも、少内の内實には微妙な變化があつたのである。

漢代郡縣の金曹は、秦代の少内を前身とする財政部局であつた。これは、金錢の出し入れと帳簿つけという「くら」そのものの管理を基礎として、文書のチェックや傳達の機構が積み上げられ、金曹の掾史を介して最終的に長官・丞につながる、文書行政の組織であつた。金曹の末端にあたる「ぜにぐら」は、その規模などに應じて、庫、臧内などの名稱で呼ばれた。少内もそのような「ぜにぐら」の一種である。これらの名稱は必ずしも制度的に嚴密に定められたものではなく、民間の家屋の「くら」とも共通する、多分に習慣的な名稱であつた。諸曹の名稱が土地の事情によつて全國一律ではなかつたのと同様、「ぜにぐら」の名稱も、土地によつて、あるいは官衙によつて異なつていたかもしれない。しかしその藏

番の任務や官秩は全國共通、最も小役人らしい小役人の世界だったのである。

第三章 郡縣の少府

(1) 少府と金曹

漢代郡縣の財政機構の中に、「少府」というよくわからない財庫がある。その存在は、『漢書』循吏文翁傳の次のような記述から知られる。

景帝の末、蜀郡守となった文翁は、蜀が僻地で「蠻夷の風」のあることを惜しんで、郡縣の小吏から才能のある者十數名を選んで長安に派遣し、博士について儒學を學ばせたり、律令を學ばせたりした。彼はそのために、「少府」の用度を節約して蜀の特産を買い、これを上計吏に託して博士に送った。數年後、學成つて歸還した留學生を、文翁は郡の右職に就け、さらに能力に應じて中央に察舉した。⁽³⁸⁾

ここに見える「少府」について、顏師古は「郡の財物を掌るの府、もつて太守に供する者なり」と注している。さらに嚴耕望氏は一步進んで、少府が郡國の守相の「私藏内庫」にあたるとしている。⁽³⁹⁾一方、雲夢秦簡などから、前述の「少内」と少府を同一視する説もある。⁽⁴⁰⁾史料はすでに出盡した感があるが、郡縣の「少府」がいかなる「府」であつたか、改めて検討してみなければならない。

蕭吉の『五行大義』に、劉向の『洪範五行傳』を引き、前漢末ごろの縣の官制を十干十二支に割り振つて、その職掌を説明した部分がある。⁽⁴¹⁾前稿と重複するが、これを整理した表を掲げる(表1)。上段の十干は功曹を始めとする諸曹、下段の十二支はその下に屬するさまざまな下役である。漢代の官印や封泥には、これら十二支に分類される官名に對應するも

甲	倉曹	共農賦	子	傳舍	出入敬忌
乙	戶曹	共口數	寅	司空	守將班治
丙	辭曹	共訟訴	卯	市官	平準寶貨
丁	賊曹	共獄捕	辰	鄉官	親事五教
戊	功曹	共除吏	巳	少府	金銅錢布
己	田曹	共群畜	午	郵亭	行書驛置
庚	金曹	共錢布	未	尉官	馳逐追捕
辛	尉曹	共本使	申	府官	百味悉具
壬	時曹	共政教	酉	庫官	兵戎器械
癸	集曹	共納輸	戌	倉官	五穀蕃積
			亥	獄官	禁訊具備
				宰官	閉藏完具

表1 縣の機構（十干十二支）

のが少なからず見出されるが、いずれも半通印。前節で述べたような「小官嗇夫」に近い下級の屬吏である。その中の辰に「少府」があり、「金銅錢布」を擔當している。⁽⁴²⁾このような「少府」の職掌は、上段に「共錢布」とされる金曹とよく似ているが、これが金曹の下役かどうかは斷言できない。いずれにせよ郡縣の「少府」は諸曹の掾史などよりも格の低い部署だったことは間違いない。

一九六二年、山西右玉縣大川村から一群の漢代青銅器が出土した。⁽⁴³⁾そのうち銅盤の口沿には「上郡小府」の刻銘があった。伴出した銅溫酒樽の銘文には、前漢成帝の河平三年（前二六）の紀年があるから、この銅盤も大體前漢後期のものと

してよさそうである。この例を始め、「少府」を「小府」と書く例は多數ある。⁽⁴⁴⁾わずか四字の銘文ではあるが、ここから前漢後期の上郡太守府に「小府」があったこと、また「小府」が銅盤のような調度品を管理していたことがわかる。

後漢末、竹邑侯の相の張壽は、「儉節を崇尚して躬みずから菲薄し、儲峙は法にあらずんば悉く留むるところなし。官を并せて相い領せしめ、倉□小府・御史を省く」と傳えられる。⁽⁴⁵⁾倉□はよくわからないが、御史は長官の公用車の御者。⁽⁴⁶⁾そして小府は、調度類の節約と呼應して省かれたのだろう。張壽はまず自分の身の回りの出費の節約と人員整理を行なつて、節儉の範を垂れたのである。文翁が「少府の用度を減省して」博士への贈り物の費用を捻出したように、少府の財源は長官の裁量で他の用途に活かしたり、⁽⁴⁷⁾いっそ廢止してしまうことさえ可能であった。

前漢末の儒者翼奉は、縣の屬吏を五臟六腑に配當して、その役目を記している（表2）。⁽⁴⁸⁾しかしテキストに混亂があつて、金曹の主な職掌が脱落している。その上、五曹を五行にあてはめた説明にも無理がある。例えば金曹は財政官のはずだが、五行における金はむしろ兵と關係が深いため、その「府」（＝腑）として「兵賊嗇夫」をあげざるを得なくなっている。そ

脾	腎	肺	心	肝	臟
功曹	倉曹	金曹	戶曹	尉曹	官
土	水	金	火	木	五行
出廩四方	陰凝藏物	堅	陽	仁	性
信	多收	主銅鐵	主婚道之禮	主士卒宜得仁	理
授教四方	主慶假 (收以民租)	主市租	主名籍 (主民利戶口)	主士卒	念
(職在刑罰)	與四曹計議	?	傳舍	獄司空	職
游徼亭長	小府	兵賊畜夫	傳舍主賓客	獄閉通亡	掌
	小府亦與四府則用 小府倉出納主餉種	主討捕			府
	府主受付				府の職掌

表 2 縣の機構 (五臟六腑)

融通の利く財源となり得ることを考慮すれば、このような翼奉の説も理解できよう。

このように見てくると、郡縣の少府は、金錢だけでなく長官の身の回りで使われる調度類をも管理する財庫であることがわかる。顔師古の「財物を掌るの府」という定義は、その點で確かである。少府の財物の用途は、長官の自由裁量に属しており、張壽の例から明らかなように、長官の御者と一緒に省かれてしまうこともあり得る。金曹の「ぜにぐら」を省いてしまったら、財政が成り立たないだろう。少府はどうやら金曹とは別の、長官自身の職務に密着した財庫だったと考えなければならぬ。では、少府は官衙の機構の中でどのように位置づけられるだろうか。

(2) 少府の位置

一九四四年春、遼陽北園で大型の漢代壁畫墓が発見された。石板を組み合わせた墓室の壁には、車馬行列や樓閣、宴飲

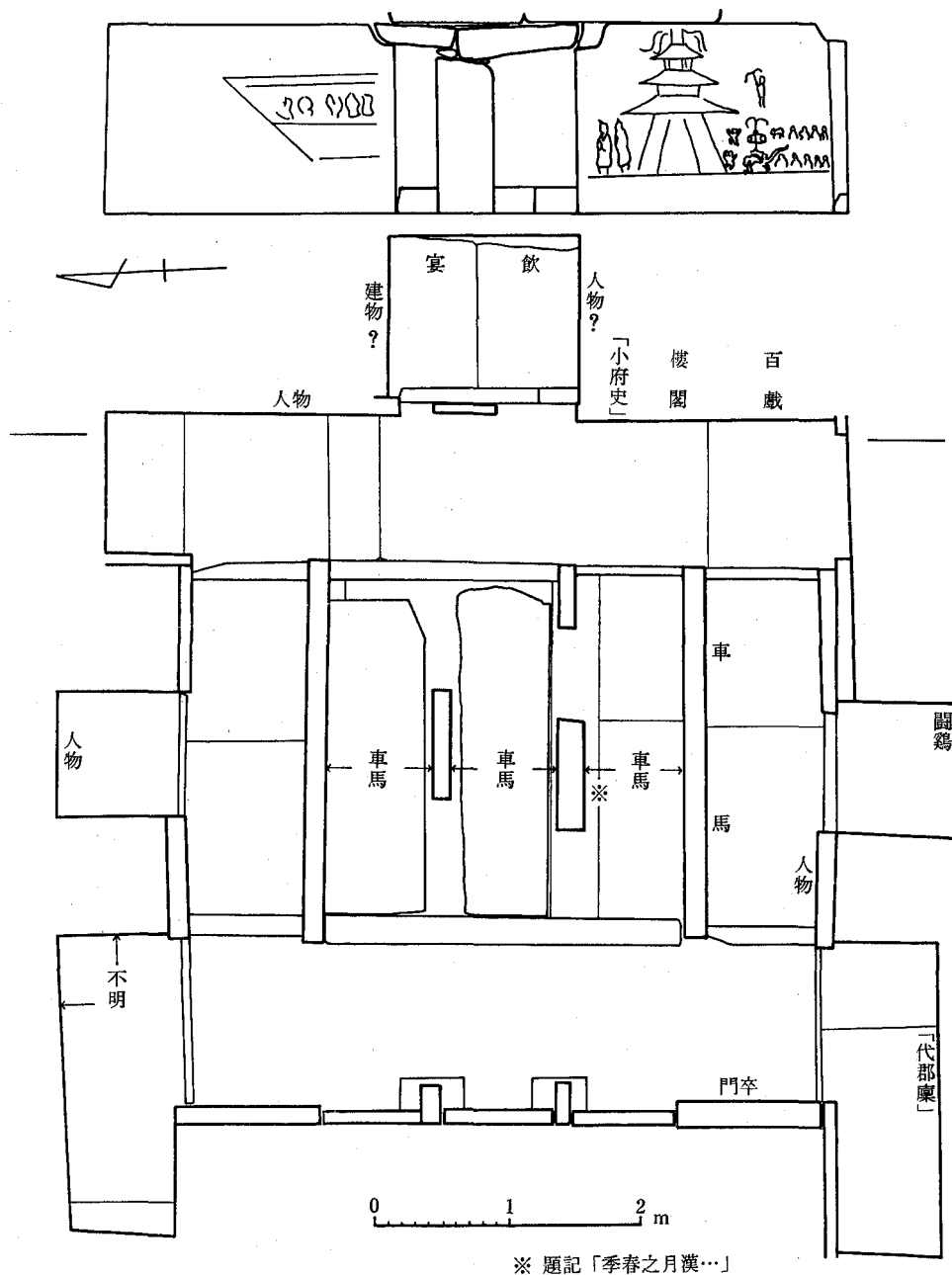


圖3 遼陽北園壁畫墓の畫題配置



圖4 宴 飲 圖

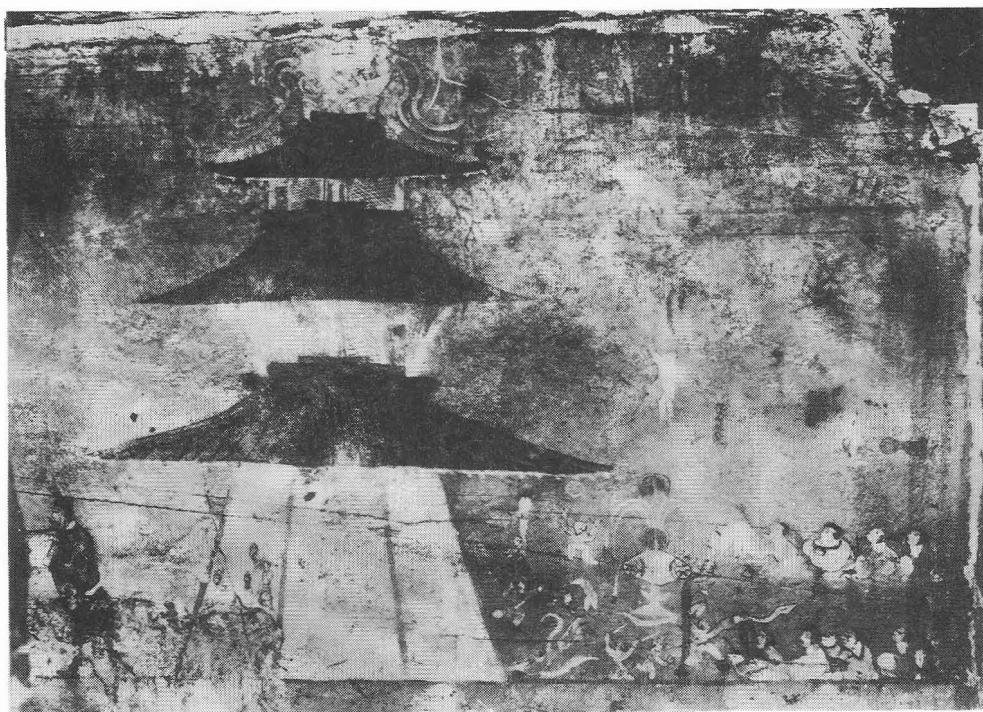


圖5 樓閣圖と「小府史」(左端, 部分のみ)

などを描いた壁畫と題記の一部が残っていた(圖3)。墓門南側耳室の「代郡廩(庫?)」と題された倉庫の圖、また墓室の一番奥にあたる東壁南部の、「教以謹、化以誠」という題記をもった樓閣圖から、墓主は代郡太守を務めた人物と思われる。東壁に設けられた小室には墓主の宴飲の圖が描かれる(圖4)。宴飲圖と樓閣圖の間には侍立する二人の官吏が描かれ、「小府史」と題されていた(圖5)⁽⁴⁹⁾。この二人は代郡の少府の役人だろう。⁽⁵⁰⁾しかし漢代の畫像で墓主の宴席に侍立する官吏は、功曹・主簿をはじめとする郡縣の右職であることが多い。⁽⁵¹⁾前節で述べたように、少府史は功曹などよりもはるかに下位の役人である。宴飲圖との位置關係からいって、「小府史」は侍立する官吏の列の末端にあたると考えた方がよいだろう。墓主の宴席の隅に控えている少府史は、宴席の調度類の係であるとともに、宴會の費用にも氣を配っていたのかもしれない。

ここで當時の官衙の構造を振り返っておこう。長官公邸としての官衙において、長官と屬吏を隔てる役割を果たしたのが「閤」と呼ばれる門である。「閤」の内部は長官の政務の場であるとともに私生活の場でもあった。「閤」の外は功曹以下諸曹の吏が仕事に勵む、官僚的ヒエラルキーの世界である。⁽⁵²⁾金曹や倉曹が「閤」の外に屬するのに對して、少府の方は長官の宴會が催される「閤」の内部と關係が深かったようである。

やや後世の例だが、『三國志』の田豫傳には次のような記述がある。田豫は魏の護烏桓校尉だったが、「清儉約素、賞賜は皆なこれを將士に散ず。胡狄私に遺るごとに、悉く簿して官に藏し、家に入れず」という高節の人物であった。この條の注に引く『魏略』はその具體例を擧げている。鮮卑の大人の素利らがやって来て、田豫に黄金を贈ろうとした。田豫は一應受け取っておき、彼らが歸った後でこれを全部「外」に引き渡し、帝に報告した。帝はこれを受えて絹五百匹を賜わった。田豫はこれを半分だけ「小府」にしまっておいた——残りの半分はもちろん「將士に散」じたに違いない——が、これさえも私せず、後日やって來た鮮卑に與えてしまったのである。⁽⁵³⁾

受け取った黄金を「外」に引き渡したというのは、『三國志』本文の「悉く簿して官に藏す」と對應しよう。護烏桓校尉府の「閤」の内を受け取った黄金を外（外）の「官」、おそらく金曹に引き渡し、きちんと帳簿に記録したのだと思われる。黄金を公金の會計に繰り入れることによって、賄賂を受けたのではないことを證明したのである。一方帝からの賞賜の方は、手元に置いた半分を、金曹ではなく「小府」に納めている。「小府」は田豫の身近な「閤」内に置かれていたに違いない。「小府」に納められた財貨は、金曹の公的財政とは異なり、中央政府への遠慮なく使うことのできる、いわば長官の「お手元金」なのである。この例は、金曹と少府の役割と官衙における位置の違いをはっきりと示している。

居延漢簡から大庭脩氏が復元した、前漢宣帝の元康五年二月（三月に神爵と改元、前六一）の詔書冊（56）にも「小府」が登場する。詔書の内容は、夏至の日取りとそれに伴う行事に關する太史の要請を受けて、御史大夫が具體的な施行方法を上奏、制可を得たものである。これが丞相から中央各官廳、全國の郡太守と諸侯の相に伝えられ、夏至を期して井戸の水と竈の火を改め、夏至を挟んで五日間、軍事と政務を休むよう命ぜられた。この詔書を受けた張掖郡が、冊書の末尾に附けて發信したのが次の執行命令書である。

三月丙午張掖長史延行太守事肩水倉長湯兼行丞事下屬國農部都尉小府縣官承書從事
下當用者如詔書／守屬宗助府佐定

（地灣一〇・三三一 勞二八）

これは張掖郡太守と丞（職務は他の者が代行している）から、屬國都尉・農都尉・部都尉および縣に下された命令だが、「部都尉」と「縣官」の間に「小府」が見える。

居延漢簡の中で執行命令書が下される場合、發令者とともに、下命の對象となる官職名（時には人名まで）が必ず明示される。また、郡太守や都尉から屬吏に命令が下る場合、所轄部局の長として諸曹の掾史クラスが指定されている。したがってこの「小府」も具體的な部局名で、命令の内容と關係する職掌をもっていたと考えなければならない。（56）この命令の

内容、すなわち夏至の休暇に關する通達と、井戸の水と竈の火を更めよという命令のうち、「小府」の職掌と關係があり
そうなのは、もっぱら後者の方だろう。ところで、井戸と竈はいうまでもなく厨房の主要な設備である。「小府」と厨房
とはいかなる關係があるだろうか。

厨房の官は、前掲表1と2では、「廚官」とか「廚」と記されている。しかし和林格爾漢墓の壁畫に描かれた護烏桓校尉
府——後に田豫が任ぜられた官衙にはかならない——において、厨房は「共官門」内にあり、その責任者は「共官掾史」
であつた。⁽⁵⁷⁾「共官」は「供官」の省略である。長官公邸としての官衙において、厨房は長官に奉仕する官であつた。この
點で厨房は、「小府」と共通する性格を持っている。前掲表2において「小府」は、廚を含む他の四府に對して、諸曹に
對する功曹と似た關係にあつた。つまり「小府」は廚など官衙の「まかない方」を統率する部局だったのである。漢簡で
命ぜられた井戸の水と竈の火の更新は、單なる掃除ではなく、季節が陽から陰へと移り變わる節目にあたる夏至の、重要
な公式行事である。これを遂行する部局は、厨房の上位にあたる「小府」でなければならなかつたのである。

郡縣の少府は、長官の「お手元金」を中心に、官衙の調度類の管理にもあたる財庫であつた。その職掌から長官の身近
に置かれ、金曹とは別の小部局として長官に直屬したと思われる。その官職としては少府史が知られているが、地位は諸
曹の掾よりも低く、倉・庫・獄など官衙の附屬施設の管理にあたる吏とはほぼ同程度、中央の少府とは比すべくもない小吏
であつた。しかし少府は單なる藏番にとどまらず、官衙のまかない方を統率する役割を擔っていた。長官公邸、さらにい
えば一種のミニ朝廷でもある郡縣の官衙において、長官の身の回りの世話にあたる部局が、帝室財政を擔當する中央の少
府になぞらえて「少府」と呼ばれたことは大いにあり得る。その意味で、前述の顏師古の解釋は基本的に正しい。

少府が管理する長官の「お手元金」の用途は、基本的に長官の自由裁量に屬した。長官が自分の身の回りの經費を節約
して財源を振り向ければ、少府は金曹の財政を補完する役割を果たし得る。しかし長官の裁量次第で、役得として私的に

流用されやすいことにもなる。このような少府の財政のあいまいさは、金曹の公的財政の嚴格さと對照的である。とはいへ、郡縣の少府を長官の家政機關としてしまうことはできない。郡縣の長官は、いかに強い權限が與えられていたにせよ、國家から俸給を支給される官僚の一員に過ぎない。郡縣の少府の財政は、このような長官の職務に伴う經費——例えば現在の官廳の「交際費」を思い浮かべればよいかもしれない——として、金曹の擔當する公的財政から留保されたものであり、本質的には官衙の一消費部門に過ぎなかったのである。ここに、郡縣の少府の財政的役割とその限界を見ることができよう。

おわりに

以上、わずかな史料から郡縣の財政機構を論じてきたが、ここで論點をまとめよう。漢代、財庫は獨立した倉庫建築から納戸、ロッカーに至るまで、その規模や形態によってさまざまな名稱を持っていた。「くら」自體の名稱からさまざまな官名も發生するが、これらはいずれも「お藏役」といった漠然とした意味の官名であり、職掌や上下關係から統一的につけられていたとは考えられない。

秦代の縣では、公金出納にあたる「お藏役」は「少内」と呼ばれていた。しかし前漢後期に郡縣の官制が整備され、諸曹の機構に分かれた部局構成が採用された結果、公金出納にあたる部局は金曹と呼ばれるようになっていった。金曹の末端では、令史や嗇夫クラスの小吏が「ぜにぐら」の當直としてその警備や財貨の出入れ、帳簿つけなどを行ない、金曹掾史を始めとする上司が帳簿などのチェックにあたる。この分擔關係は、金曹が「くら」そのものの管理を基礎として、その上に積み上げられた文書行政の組織であったことを物語る。このような組織の中で、秦代から引き繼がれた「少内」

の名稱は意味あいが限定され、下級の藏番の官名となった。これは從來漠然としていた「お藏役」内部の官名が、役割に従って分化していった結果であった。

ところで漢代の郡縣には、少府という財政機構もあった。少府は金曹とは別の機構として長官に直屬し、長官の身の回りの調度類などの調達や營繕にあたる財庫で、官衙の「まかない方」を統括する機能を持っていた。少府の財貨は長官の「お手元金」とみなされ、長官の裁量で他の用途にも活かすことができた。ここに郡縣の少府のユニークな役割があった。しかし郡縣の少府は、本質的には長官の職務に伴う経費を管理する、官衙の一消費部門に過ぎず、その官吏の地位も諸曹の掾史より一段低かった。したがって郡縣では、公金出納にあたる金曹と食糧の出納にあたる倉曹の財政こそ、財政機構の基幹だったのであり、少府を過大評價することはできない。

このような郡縣の財政機構を中央のそれと對比すれば、金曹と倉曹が國家財政を擔當する大司農に、また少府が、少なくとも名稱だけは、帝室財政を擔當する少府にあたることは明らかである。これは、郡縣の財政機構が中央のそれと見かけ上は相似した構造を持っていたことを示している。

本稿では漢代郡縣の財政の、主として機構面だけを論じてきた。この機構の中を、租税として徴收された物資や財貨はどのように移動し、消費されていくのか。このような財政機構の動きについての分析は、すべて今後の課題として残されている。⁽⁸⁸⁾ 本稿は、漢代の財政を分析するための準備作業のひとつに過ぎない。

注

(1) 加藤繁「漢代に於ける國家財政と帝室財政との區別並に帝室財政一斑」『支那經濟史考證』上巻所收、東洋文庫、一九五二)

(2) a A.F.P. Hulswé, *The Ch'in documents discovered in Hu-pei*

in 1975, *Young Pao*, vol. 64, no. 4-5, 1978.
b 于豪亮「雲夢秦簡所見職官述略」文史八、一九八〇
c 楊寬「從『少府』職掌看秦漢封建統治者的經濟特權」秦漢史論叢

一、一九八一

d 羅開玉「秦國「少内」考」西北大學學報、一九八一—三

e 工藤元男「睡虎地秦墓竹簡に見える大内と少内」史観一〇五、一九八一

f 山田勝芳「秦漢時代の大内と少内」集刊東洋學五七、一九八七

g 彭邦炯「從出土秦簡再探秦内史與大内・少内和少府的關係與職掌」

考古與文物一九八七—五

(3) 『論衡』別通篇

富人之宅、以一丈之地爲内。内中所有、桷置所藏、織布絲帛也。貧人之宅、亦以一丈爲内。内中空虛、徒四壁立。故名曰貧。

(4) 田中淡「中國建築からみた寢殿造の源流」『古代文化』三九卷一一號一九八七、参照。

(5) 雲夢秦簡の封診式、「穴盜」の條(六五三—六三三簡)に見える家屋は小堂・房内・大内に分かれていた。この場合の「大内」は寢室にあたる

と考えられる。前注田中淡論文参照。一方首都咸陽には、後述するように「大内」という財庫もあった。この二つを名稱から區別することは困難である。

(6) 『太平經』六罪十治訣(合校本二四六頁)

「……願聞仁者之行。」然。夫天地生凡財物、已屬於人、使其無根、亦不上著於天、亦不下著於地。物者、中和之有。使可推行、浮而往來、職當主周窮救急也。夫人畜金銀珍物、多財之家、或億萬種以上、畜積腐塗。如賢知以行施、予貧家樂、名仁而已。助地養形、助帝王存良謹之民。夫億萬之家、可周萬戶。予陳收新、毋疾利之心、德洽天地、聞於遠方、尚可常得新物、而腐塗者除去也。……夫仁可不爲乎哉。或有遇得善富地、并得天地中和之財、積之適億萬種、珍物金銀億萬、反封藏逃匿於幽室、令皆腐塗。見人窮困往求、罵詈不予。既予不即計、必求取增倍也。……與天爲怨、與地爲咎、與人爲大仇、百神憎之。所以然者、此財物迺天地中和所有、以共養人也。此家但遇得其聚處。比若倉中之鼠、常獨足食、此大倉之粟、非本獨鼠有也。少内之錢財、本

非獨以給一人也。其有不足者、悉當從其取也。愚人無知、以爲終古獨當有之、不知迺萬戶(↓戸)之委輸、皆當得衣食於是也。愛之反常怒喜、不肯力以周窮救急、令使萬家之(↓)乏絶、春無以種、秋無以收、其冤結悉仰呼天、天爲之感、地爲之動。不助君子周窮救急、爲天地之間大不仁人。……」

(7)

後掲注20に引いた『周禮』職内の鄭注も「少内」を錢を入れる場所としている。ただし鄭玄のいう「少内」は官の「せにぐら」としての「少内」である。『太平經』有過死謫作河梁議(合校本五七五頁)に、天神の罰として天候不順がもたらされると、「其國空虛、倉無儲穀、少肉無儲錢、歲歲益劇、無以給朝廷。復除者多、倉庫無入、司農被空文無以陳、食奪祿除、中國少所用。人民仰國家、而不各施、有難生之期。」とある。「倉」と對になった「少肉」は、恐らく「少内」の誤りだろう。『太平經』の「少内」は官の「せにぐら」をも含んだ一般的な名稱だと考えられる。したがって、前注の「大倉」「少内」の所有者を皇帝であるとすると王明氏の説(合校本序文)は、黃巾の革命運動に引きつけ過ぎた解釋としなければならない。注2c、f論文も同様である。見られるように、この文は富者の義務としての「仁」を説いており、その中に皇帝が含まれるとしても、皇帝だけについて論じているわけではない。渡邊信一郎「仁孝——あるいは二—七世紀における一イデオロギー形態と國家——」『史林』六一卷二號、一九七八、参照。

(8)

この傾向は、穀物を収める各種の倉庫の名稱がはつきり分かれていることと對照的である。秋山進午「漢代の倉庫について」『東方學報』京都第四六冊、一九七四、参照。

(9)

南陽地區文物隊等「唐河漢鬱平大尹馮君孺人畫象石墓」『考古學報』一九八〇—二。

(10)

前注8に引いた秋山進午論文参照。

(11)

報告者がこれを「臧閣」と讀んでいるのは誤り。

(12)

拙稿「漢代の官衙と屬吏について」『東方學報』京都第六一冊、一九

- (89) 參照。
- (13) 甘肅省文物隊等『嘉峪關壁畫墓發掘報告』(文物出版社、一九八五)。
注2e 論文參照。
- (14) 『史記』卷一一孝景本紀、中六年(前一四四)四月
以大內爲二千石(集解、韋昭曰、大內、京師府藏、置左右內官、屬大
內(索隱、主天子之私財曰少內。少內屬大內也)。
- (16) 『漢書』卷一九百官公卿表上、大司農の屬官に見え。初出例は『史
記』卷三〇平準書「當是時(元光五年)前一三〇ころ、漢通西南夷道、
作者數萬人、……悉巴蜀租賦、不足以更之。乃募豪民田南夷、入粟縣
官、而內受錢於都內。」注2f 論文參照。
- (17) 拙稿「居延漢簡月俸考」(『古史春秋』第五號、一九八九)參照。
- (18) 山田勝芳「後漢の大司農と少府」(『史流』一八號、一九七七)參照。
- (19) 『太平御覽』卷二二六引應劭『漢官儀』
少府掌山澤陂池之稅、名曰禁錢、以給私養、自別爲藏。少者小也。故
稱少府。
- (20) 前者の説は注15に引いた『史記』索隱に見え。注2a 論文一九六頁
參照。後者は『周禮』天官、序官、職内の鄭注「職内、主人也。若今
之泉所入、謂之少内。」に關する賈疏に
案、王氏漢官解云、「小官嗇夫、各擅其職。謂倉庫少内嗇夫之屬、各
自擅其條理所職主。」由此言之、少内藏聚、似今之小府、但官卑職碎、
以少爲名。
とある。兩者ともに注釋の本筋からはずれた推測に過ぎない。
- (21) 縣・都官坐效・計以負債者、已論、嗇夫即以其直錢分負其官長及冗吏、
而人與參辦券、以效少内。少内以收責之。……金布(一四七、八)
番號は『雲夢睡虎地秦墓』(文物出版社、一九八二)による。以下同じ。
告臣 爰書、某里士五甲縛詣男子丙、告曰、「丙、甲臣。橋悍不田作、
不聽甲令。謁賈公、斬以爲城旦、受賈錢。……」・令少内某・佐某以
市正賈丙丞某前。丙中人、賈若干錢。……(六一七、二一)
- (23) 毋敢以火入藏府・書府中。吏已收藏、官嗇夫及吏夜更行官。毋火、乃
閉門戶、令令史循其廷府。節新爲吏舍、毋依藏府・書府。内史雜(二
六四、五)
- (24) 嚴耕望「秦漢地方行政制度」(『中國地方行政制度史』上編所收、中央
研究院歷史語言研究所、一九七四)參照。
- (25) 嚴耕望前掲書一二四頁參照。
- (26) 新出土のEPT5147簡。甘肅省文物考古研究所編『居延新簡釋粹』
(蘭州大學出版社、一九八八)、大庭脩『木簡學入門』(講談社學術文
庫、一九八四)一九〇頁參照。
- (27) 陳夢家「漢簡所見太守・都尉二府屬吏」(『漢簡綴述』所收、中華書局
一九八〇)、裘錫圭「漢簡零拾」(『文史』一二輯、一九八一)參照。
- (28) 前注17引拙稿のCタイプの帳簿に見える。なお、この事務を士吏が行
なう例として、破城子二四・一〇一簡(勞四五〇)參照。
- (29) 八月丁丑鄆卒十人
其一人守閤 一人守園 一人使養
一人取狗灌 一人治計 一人助
一人守園 一人助
- (30) 次の例のように、卒から預かった私錢を「閤錢」と呼ぶのは、倉庫と
しての「閤」と關係があるかもしれない。
史奉錢十五萬七百 私藥二百廿二
卒閤錢六萬四千 八月見穀
甲渠候官 卒吏錢已發——別筆
(破城子二六四・一一 勞二二七)
- (31) 注27引裘錫圭論文、邸閣の條參照。
- (32) 大庭脩注26前掲書、二四九、五〇頁參照。
- (33) 『周禮』天官の序官、職内の賈疏に引く。前注20參照。
『漢代の文物』(京都大學人文科學研究所、一九七六)一一、書契(永
田英正氏)、五〇九、一〇頁參照。「少内」半通印は羅福頤『秦漢南北
朝官印徵存』(文物出版社、一九八七)一三・八一頁に、また封泥は

『封泥攷略』卷一—四一に見える。桂馥『札樸』卷八少内印條、陳直『漢書新證』(一九七九年版)三一—四、三八七頁参照。

(34) 『漢書』卷七四丙吉傳

後元二年、……因赦天下。郡邸獄繫者、獨賴吉得生、恩及四海矣。曾孫病、幾不全者數焉。吉數敕保養乳母、加致醫藥、視遇甚有恩惠、以私財物給其衣食。……元帝時、長安士伍尊上書言、「臣少時爲郡邸小吏、竊見孝宣皇帝以皇曾孫在郡邸獄。是時治獄使者丙吉見皇曾孫遭離無辜、……選擇復作胡組養視皇孫、吉常從、臣尋日再侍臥庭上。……既遭大赦、吉謂守丞誰如、皇孫不當在官、使誰如移書京兆尹、遣與胡組俱送、京兆尹不受、復還。及組日滿當去、皇孫思慕。吉以私錢贖組令留、與郭徵卿並養數月、乃遣組去。後少内奮夫白吉曰、『食皇孫亡詔令(師古曰、少内、掖庭主府藏之官也。食讀曰飢。詔令無文、無從得其慶具也)』。時吉得食米肉、月月以給皇孫。……」

(35) 注2f論文参照。

(36) 『漢書』卷一九百官公卿表上

典客、……武帝太初元年、更名大鴻臚。屬官有行人・譯官・別火三令丞、及郡邸長丞(師古曰、主諸郡之邸在京師者也)。……初、置郡國邸屬少府、中屬中尉、後屬大鴻臚。

(37) 『周禮』天官、職内、「凡受財者、受其貳令而書之。」

(鄭注)受財、受於職内、以給公用者。貳令者謂若今御史所寫下本奏、王所可者、書之若言、「某月某日、某甲詔書、出某物若干、給某官某事。」

(賈疏)釋曰、其有官府合用官物而受財者、竝副寫一通、敕令文書與職内、然後職内依數付之。故云「受其貳令書之。」

(38) 『漢書』卷八九循吏文翁傳

文翁、廬江舒人也。少好學、通春秋、以郡縣吏察舉。景帝末、爲蜀郡守、仁愛好教化。見蜀地辟陋有蠻夷風、文翁欲誘進之、乃選郡縣小吏開敏有材者張叔等十餘人、親自飭厲、遣詣京師、受業博士、或學律令。

漢代郡縣の財政機構について

減省少府用度、買刀布蜀物、齎計吏以遺博士(師古曰、少府、郡掌財物之府、以供太守者也)。數歲、蜀生皆成就還歸、文翁以爲右職、用次察舉、官有至郡守刺史者。

(39) 嚴耕望前揭書、一二六—七頁参照。

前注2に引く諸論文のうち、少内II少府説に立つのはc d fである。cは注20に引いた後世のあやふやな記述に基づいている。d fはその根據として、雲夢秦簡、法律答問に分類される四〇二簡

府中公金錢私費用之、與盜同法。・可謂府中。・唯縣少内爲府中、其它不爲。

をあげる。「府の中の公金錢を私に貸し付けて用いた場合、盜と同様の法律を適用する」という律の、「府の中」は具體的には縣の少内を指している。一方、「府」の一種として少府がある。だから少内は少府である、という論旨である。しかしここからは、少内と少府がともに「せにぐら」の一種であるということは言えても、両者が同じものであるということにはならない。またこれらの論文では、漢代の金匱の機構と役割が無視されており、嚴耕望氏に代表される漢代地方行政の研究との脈絡がつけられていない。

(41) 『五行大義』(知不足齋叢書本)卷五。嚴耕望前揭書二三五—六頁に、同氏による校勘と研究がある。

傳世の印や封泥に「少府」あるいは「小府」の半通印がある。「少府」封泥『再續封泥攷略』卷一—二は中央の少府に比定されているが、二千石の高官が半通印を使ったとは思えない。「勃小府」半通印(故宮博物院藏、『秦漢南北朝官印徵存』七五頁)は勃海郡の少府の印だろう。

(43) 郭勇「山西右玉縣出土的西漢銅器」(『文物』一九六三—一一)参照。

注2f論文は居延漢簡の用例から、中央の少府が「少府」、郡縣の少府が「小府」と書かれるとしているが、中央の少府を「小府」と書く例もある(地灣五三・一A 甲三五九)ので、どちらでもよかったと

考えるべきである。

- (45) 『隸釋』卷七、竹邑侯相張壽碑（建寧元年＝一六八卒）

君下車、崇尚儉節、躬自菲薄、儲侍非法悉無所留。并官相領、省倉□小府御史。朝無姦官、豎無淫寇。

原石は現山東成武縣孔廟藏。この碑は明代に破壊され、引用した部分は現在「自菲薄、儲侍」と「所留。并官相」しか見えない。『山東秦漢碑刻』（齊魯書社、一九八四）二二参照。

- (46)

注2。論文はこれを竹邑侯の家吏、f論文は張壽の侍従とし、『後漢書』列傳七九儒林下、孫堪傳「嘗爲縣令謁府、趨步遲緩、門亭長譴堪御史。堪便解印綬去、不之官。」を引く。しかし「御史」は『漢書』卷七四丙吉傳「（丞相丙）吉馭吏嘗酒、數逋蕩。嘗從吉出、醉歐丞相車上。」に見える「馭吏」と同様、長官の御者だらう。『後漢書』の例は、郡太守府の門の所で待っていた御者が門番に、孫堪の態度が悪いとなじられたのである。長官の御者としての「御史」は、仙人唐公房碑（『隸釋』卷三）にも見える。

- (47)

居延漢簡で、以下の簡は都尉府の小府に關係すると思われる。

具移所付小府候長積□府錢數□破城子八・八 勞二八四
 候長龍輔千二百哀九百卅小府□ 同六八・七三 勞一八二

言小府當償責小府下所移以君□拜 召（別筆）

（同一四五・三六十一四五・二四十三一七・四 甲八二六）

いずれも釋讀が困難だが、あるいは候長などに小府の錢が貸し附けられたのかもしれない。

- (48)

注41に同じ。

- (49)

この墓は一九四四年三月に發見された。最初の調査報告として、李文信「遼陽北園畫壁古墓記略」（『國立瀋陽博物院籌備委員會彙刊』第一期、一九四七）がある。一九四四年五月には駒井和愛氏を始めとする日本側調査隊の調査が行なわれた。その概報が駒井和愛「遼陽北園の

漢代壁畫」（『中國考古學論叢』所收、慶友社、一九七四）、同『遼陽發見の漢代墳墓』（東京大學文學部考古學研究室、一九五〇）である。さらに一九四四年夏には、北野正男氏らによる調査が行われている。

その調査報告が Wilma Fairbank and Masao Kitano, Han Mural Paintings in the Pei-Yuan Tomb at Liao-Yang, South Manchuria, *Artibus Asiae*, vol. XVII, 3/4, 1954 である。この論文によつて、墓室の實測圖とともに未發表の寫眞が多く公表された。宴飲圖と樓閣圖はその圖10と12に見える。ただし本稿の圖3と5は、日本側の二つの調査隊から水野清一氏に提供されたと思われる寫眞の燒附と、水野氏による實測圖の寫し（ともに現在京都大學人文科學研究所の考古資料として保存）に基づく。

- (50)

「少府史」は蒼頡廟碑（西安碑林藏、延熹五年＝一六二立）碑陰の釀金者リストにも見える。『金石萃編』卷一〇などの釋文は「少府史」に作るが、『增訂寰宇貞石圖』（國書刊行會再刊、一九八二）卷一などの拓本では「小府史」に見える。

- (51)

一例をあげれば、遼陽北園の壁畫墓の北西數キロにある棒臺子二號墓は、北園と似た構造の墓室を持っているが、壁畫の宴飲圖に侍立する官吏は「主簿」「議曹掾」である。王增新「遼陽市棒臺子二號壁畫墓」（『考古』一九六〇一）参照。

- (52)

前注12にあげた拙稿参照。

- (53)

『三國志』卷二六、魏書田豫傳
 豫清儉約素、賞賜皆散之將士。每胡狄私遺、悉簿藏官、不入家、家常貧置。雖殊類威高豫節。（注）魏略曰、鮮卑素利等、數來客見、多以牛馬遺豫。豫轉（北堂書鈔三八作輒）送官。胡以爲、「前所與豫物顯露、不如持金。」乃密懷金三十斤（書鈔作四十斤）、謂豫曰、「願避左右、我欲有所道。」豫從之。胡因跪曰、「我見公貧。故前後遺公牛馬、公輒送官。今密以此上公、可以爲家資。」豫張袖受之、答其厚意。胡去之後、皆悉付外、具以狀聞。於是詔褒之曰、……乃即賜絹五百匹。豫得賜、

分以其半藏小府、後胡復來、以半與之。

- (54) 同様の表現として、曹全碑第九行「還師振旅、諸國禮遣、具二百萬、悉以簿官。」がある。『金石萃編』卷一八参照。

- (55) 大庭脩「居延出土の詔書冊」(『秦漢法制史の研究』所收、創文社、一九八二) 参照。

- (56) 永田英正「簡牘よりみたる漢代邊郡の統治制度」(講座敦煌3『敦煌の社會』所收、大東出版社、一九八〇)、のち同氏「居延漢簡の研究」、同朋舎、一九八九) は、ここに見える「小府」を張掖太守府の謙稱としている。しかしそのような謙稱の例は他に知られていないようである。正式な命令書の中で、このように屬吏の官名と紛らわしい謙辭が使われたとは考えにくい。中國の研究者はほとんどが「小府」を郡太守府か都尉府の屬吏の官名と考えている(注27引陳夢家論文参照)。書かれる位置からすれば、「小府」は都尉府の屬官と考えられるが、その場合、郡太守から都尉を飛び越えてその屬吏に直接命令が下ることになり、この種の文書としては不自然である。一方「小府」を郡の

屬吏だと考えると、書かれる位置が明らかにおかしいことになってしまふ。したがって、この簡自體から「小府」がどちらの屬官かを判斷することはできない。ただしこれまでの論述から、少府は郡・都尉・縣それぞれに存在しており、その限りではどの屬官であっても不思議ではない。なお、注27論文はこの簡を、郡太守府の文書が、都尉

を名指しすることを避けて、その侍官宛てになっていると解釋し、「小府」を都尉の側近の屬吏としている。しかしその根據としてあげる例は、太守府から直接兵卒個々にあてる形式で書かれた「檄」の例であり、この場合の參考にはならない。大庭脩『木簡』(學生社、一九七九) 一四九―一五七頁、M. Loewe, *Some Military Despatches of the Han period*, *T'oung Pao*, vol.51, no.4-5, 1964 参照。

- (57) 『和林格爾漢墓壁畫』(文物出版社、一九七八) 七七頁、八八頁、また注12引拙稿参照。

- (58) 渡邊信一郎「漢代の財政運営と國家的物流」(京都府立大學學術報告人文第四一號、一九八九) はその先驅的業績である。